

## 『物くさ太郎』の枠組み

青木 晃

一

信濃から京に上って大番を勤め、その歌才により上臈女房を得て、本国に下り国司となつて至福を楽しむ「物くさ太郎」の物語は、随所にこらされた趣向により笑いをよびつつ進行する。この物語の代表的な説解ともいへば岩波書店版と小学館版との注釈に、以前からこれでよいのかの思いを私は抱き続けてきた。近来、凝らされた趣向の部分部分について興味ある説解が示され、だんだんおもしろくなつて来た。拙き試稿を草して、私も参入したことがある。

近時、別の目途で、「善光寺縁起」の世界を調べてみる機会をもつた。かねがね気になっていたのが、巻物を繙き見る物くさ太郎の先祖の系譜であつた。彼は善光寺如来の申し子なのである。善光寺縁起の語る世界に、作品「物くさ太郎」の枠組みは基盤を据えて立っているのではないか……私にそんな考えが来たつた。その来由の一端を記してみたい。

一一

物くさ太郎は、その当意即妙の歌才によつて上臈女房を得、公卿殿上人にもおとらぬ聞えが叡聞に入つて、その先祖をた

ずねると――

人王五十二代のみかど仁明天皇の御子に、二位の中將殿に一人も御子なかりしに、善光寺の如来にまいりて一人の御子を申うけて、御年三十歳にして二人の親は失せたまひぬ。そのち、ちりにまじはりて、かかるいやしき人となりたまへり云々

〔絵巻系国会図書館本による〕

とある。これが「おたかの本地系」になると、仁明天皇第二の皇子に深草天皇あり、その御子二位中將が「信濃へ流されてとし月をおくり給ひしが」とあつて、そこにさずかつた御子が御年三歳にて二人の親におくれとなるのだが、それは兎も角、元禄五年版「善光寺如来縁起」にみる本多善光が由来を、これと見較べてみよう。

(信濃国) 伊那郡麻績の里に一人の土民有。本多善光といへり。其先祖は武勇の家より出たりといへども、いつしか民間にくだりて此里に住けるが、たぐひなきまづしき身にてぞありけれ云々

とあつて、善光の武勇の家が太郎の皇胤とまで常套のせり上

りはみせているものの、広義の貴種流離の範疇には共にすっぱりおさまるものなのである。本来、善光の伊那・麻績の里(家)が最初に如来の安置された所(本善光寺)で、やがて水落の現在地に堂塔建立して移られたのだから、二位の中將がどちらに祈誓したかわからぬところだが、安曇野の地に穂高の神が祝われている所からみると、現在の地を想定して語られたものと考えてよろしかろう。

民間の塵にまじわつた者として、善光も、そして物くさ太郎も、「竹の柱にわらの床、かきのひまもる……」如き住家のありさままわびしき風情、あるいは寝殿の造りに少し足らねば「竹四本はしらにたて、ひわだふきとおもひなしてこもを引おほいて」いる如き、同じ趣向の描写となる。

三

信濃国に大番(椀番、長夫)の役が当つて、彼らに白羽の矢が立てられ、最初はことわるが後に自らのぞんで上洛して行くのは、善光も物くさ太郎も同様であり、やがてその夫役

の期満ちて後、一人都に残るのも二人同じである。本多善光は、夫役の間、「都のうち、一所の名所をもみず候。田舎にかへりて後、都物語聞んと申さんに、何をか語申さん。今生の思ひでに一見いたし度候」とて、都の内の名所古跡を隅々巡つて後、名にし負ふ難波の堀江にさしかかると、海中より光る如来が飛び移り、これを背負うて本国に下ることになるのであった。

物くさ太郎は妻求めのために、清水の観音の縁日に一日苦勞し、やっと探し入った上臈女房の局の縁で、ひげ籠に入れて出されたかきくり・なしと添えられたしおの謎を案じかね、津の国のなにはのうらのかきなれば

うみわたらねどしほはつきけり

と詠するのであった。唐突に、摂津国難波の浦が歌い出される意味を問うこともなかったようだが、善光の物語を下敷きに聞けば、唐突ではなくこれは自然なのであった。物くさ太郎は、女房との出合いの口説の中で、すでに都の名所めぐりをしており、それは小歌のパロディとして語り出されていることなど、私が別稿にて述べた。

善光は如来を得、物くさ太郎は妻女を得て、ともに本国信濃国へ下つて行つた。共に、至福への宝を得たのであった。如来が現世で女房の形に現われることは、説話世界ではよくあることだと私は考えている。彼らが本国を出て上洛し、(遍歴修行して) 新たな力を得るに至る物語は、多くの類例を見るのである。

#### 四

いやしき身として竹四本の柱にこもをかけていた男が、大番の夫役で上洛し、役果てて後それぞれに至福の宝を得て本国信濃へ下つたという物語の枠組みは、かなり細部にわたつてまで一致していることが見てとれよう。

最後の仕上げは、彼らが官位をえ、神仏と敬められるに至る物語である。

『善光寺如来縁起』は、善光が如来を負い奉りて帰り、これを安置して後、

卷第四・七章 皇極天皇崩御、冥途にて善佐(善光の子)

見たてまつり……

八章 如来、善佐が願によつて……（天皇）御蘇生

九章 本多善光・善佐、勅命によつて参内并二兩人国主となること

と章段が続いて、善佐は信濃守、善光は甲斐守になったと語る。この少々複雑な靈験譚部分を一气にはしよつて、物くさ太郎は父の本位「信濃の中將」となり、甲斐・信濃両国の国守ともなつてしまうのである。ここでは、本多の父子で分けた国守を、太郎は一身に受けてはいるが、国名は一致している。

そして、本多一家の者たちは、善光・女房（弥生の前）・善佐が三卿として善光寺本堂に祭られるに至る。これは、一光三尊の御本尊に対応する型で配されているわけだが、同じように、物くさ太郎はひたかの大明神、女房はあさひの権限と示現して、「こひする人は、男女ともにみづからがところへまいれ」と祈誓あり、また「ながいきの神」ともなつたと物語られる。縁起・靈験譚のめてさは、その人々が神仏と

祝われて完結するのである。

「善光寺縁起」には、応安縁起・応永縁起・寛文八年版縁起といった真名文のものがあつて、今私が用いた元禄五年版が仮名文出版の代表的なもの、以降この型が重ねられるのである。この事によつて、説経・唱導の徒の種本ものから一般の人々の目に触れ、説まれるようなものになつていった姿がたどれると思う。

従つて、唱導の徒に善光寺聖の語る縁起譚がかなり拡がり、あるいは絵入りの仮名縁起が説まれるようにまでなつた頃、「善光寺如来縁起」如き世界の型を枠組みとして寝太郎譚が語り出され、「物くさ太郎」はもてはやされたものだろうと私は説む。

女人救済の神は、恋を結ぶの神となつた。

〔一九八九・一〇・三一記〕

（本学非常勤講師・関西大学教授）